「癒やされた傷」ルカによる福音書21章1節～4節

　保育園の卒園式も無事終わることが出来ました。何時ものことですけれど、送り出した子ども達がこれからどんな風に成長していくのか、これはもう神様にお任せするしかありませんが、子ども達の未来を思うと環境問題や戦争のことなど考えると、これから将来どうなっていくのかと心配になってしまうのですが、本当に無事に成長して行くことが出来るようにと祈るばかりです。

　3月は卒園･卒業の季節です。神学校の校長先生が卒業式に校長先生が、出エジプト記15章22節の「マラの苦い水」の箇所を引いてお話しされたことを思い出します。あの箇所はモーセがイスラエルの人達を率いて砂漠を旅して、マラについて水を飲もうとしたら、その水は苦くて飲めなかった。そこで、神様の示されたとおりに、いずみの中に木の棒を投げ込むと水は甘くなって飲むことが出来るようになった。という箇所です。

　そこで、学生達を送り出すことはお祝いでもあるけれども、これから厳しい世の中を渡っていかなければならないと思うと、本当に辛い。そんな、苦い世界をあなた方の存在でマラの水のように、穏やかになるようなそんな存在でいて欲しいというものでした。

　本当にわたしも、子ども達が小学校へ進んで保育園では経験しなかった辛い出来事も多いと思います。それが成長というものです。でも、自分をしっかり持って成長していって、やがては校長先生のお話ししてくれたような大人になってもらいたいと、そんな思いで卒園式を終えました。

　さて、今朝の聖書の箇所もこの季節受難節の時に読まれる箇所です。イエス様の最後の一週間の出来事とされている箇所です。イエス様はその最後の一週間をエルサレムで過ごされました。そして、毎日神殿へ出かけて宣教をされ、その中で弟子たちに教えたり、また論的達と論争されたりしていました。

　ここでイエス様は、金持ちが賽銭箱に献金を入れるのを見ておられた。とありますが、この金持ち達とは前の20章の45節以下の、「律法学者に気をつけなさい、彼らは長い衣をまとって歩きたがり、また、広場で挨拶されること、会堂では上席に座ることを好む。そして、やもめの家を食い物にし、見せかけの長い祈りをする。」そんな人達のことなのです。

　この人たちは、自分たちがどれだけ献金をして神殿運営に寄与しているか、或いは信仰熱心で神様から多くの恵みを頂いているかを誇示している、そんな人達をイエス様は見ていたわけです。さらには、こんな人たちが食い物にしていたやもめの存在とかけているのです。

　なんでも、エルサレム神殿には賽銭箱が６固あって、これが「神殿運営のため」とか「神殿補修のため」とか「司祭の生活のために」とか、そんな風に使い道を決めて、その賽銭箱に賽銭を入れていたらしいのです。さらには、その賽銭箱の所に人がいて、「今この人はいくら入れました。」とか、そういうことを公表していたらしいのです。日本では献金は匿名でするのが常識ですが、この当時はそんなことは無く、いくら入れたか大勢の人達の前で発表されたらしいのです。だから、わずかしか入れられないとそれがみんなに知れてしまう分けです。そして、沢山献金が出来ると言うことはそれだけ神様から恵みを頂いている。神様から認められた人あるいは多く捧げたものほどそれだけ見返りがあると考えられましたから。みんな、こぞって大金を献金していたわけです。

　そんな所で、貧しいやもめ、やもめというのは一度結婚したけれど何らかの事情で、今は独り身でもう結婚はしないと決めた女性のことです。当時女性の職業というのも限られていましたし、そんな高収入を得ることは難しかったようです。また、やもめでいるということはそれ自体何か問題があるからだとも考えられていました。

　そんな、やもめがレプトン銅貨2枚を献金したのです。これは、沢山の人に紛れてされたわけでは無く、はっきりとこの人はレプトン銅貨2枚入れました。と発表されたわけです。普通はデナリオン銀貨を神殿に奉げる献金には用いていたらしいですから、レプトン銅貨を入れるというのはそれだけ思い切った行為と言って良いかもしれません。

　イエス様は、「金持ちは有り余る中から献金したけれど、この人は乏しい中から持っている生活費を全部入れた」と言って、賞賛してくれましたが本人にしてみればよけいに注目を浴びることになってしまいますから、そっとしておいて欲しかったというのが本音のような気もします。

　だいたい、1レプトンというのは、1デナリオンの1/128と言われていますから、本当に少額です。1デナリオンが1日の日給にあたるとよく言われますから、今で言えば100円かそれ以下かも知れません。生活費にもならないくらいです。そんな金額であれば、後は神様お願いしますと言う気持ちで、えいやっと。全部献金してしまうと言うことも出来たような気がします。この女性にしてみれば、イエス様には余計なことは言わずにそっとしておいてもらいたかったのが本音かも知れません。しかし、イエス様はそんなこの女性の隠しておきたいところ、人に触れられたくない傷口に敢えて触れられるのです。

　そんな、傷口に触れられたときに人のする反応はやはり、そんなことはやめて欲しいと言うことそして、中にはそのために怒りそんな自分の傷に触れたものを赦さないという思いに駆られる人もいるでしょう。そしてそんな人達こそ、おおむね自分をよく見せようと着飾ったり、多額の献金をして自分の信仰をひけらかしたりして、その傷を隠そうとするのです。イエス様はそのことに気づいておられたのです。

　だから、何も隠し立てすること無く、自分の持てるものというか、本当に自分自身の有様をそのまま神様の前に差し出した。そのことでこのやもめを賞賛したのだと思います。

　イエス様も同じように、十字架の上で傷を負われました。釘で打ち付けられて、ローマ兵に脇腹を槍で刺されました。そしてその傷を負われたまま復活されたのです。栄光の姿、復活の主には傷があったのです。これは大きな事だと思います。全く傷の無い、完全な姿をとって甦るのが理想の姿では無いでしょうか。しかし、イエス様には傷がありました。復活を疑うトマスはその傷跡に手を入れたと聖書にはあります。

　人は誰でも何かしらの傷を持っているものです。心の傷もあれば、身体の傷もあります。それを隠したくなるのが人情だと思います。そして、自分にそんな傷が無ければ、完璧な姿であれば何も臆すること無く生活出来るのにと思うのも仕方の無いことです。

　しかし、イエス様はそんな自分自身の傷が明らかになることを恐れ、尻込みしてしまうわたし達に、その傷を持ったままで生きて良いと、それどころかその傷こそ、あなたの大切なものなんだとそう言って下さっているのです。人生の競争に敗れて神様の前に出てくることも出来ない。そんな思いと傷を持ったこの女性にイエス様は、その誰も経験したことの無い傷、悲しみこそが神様の前では、どんな金貨よりも大切なささげ物だと言ってこの女性を慰め受け入れて下さったのです。

　どんな傷であっても、そこに価値があると認められるときに、この傷は癒やされるのです。そしてまた、同じような傷をおった者たちを仲間として受け入れ癒やす働きも出来るのです。戦争や紛争で傷ついて人達を本当の意味で受け入れ、慰めることが出来るのもやはり同じような経験をした人達なんだと思います。だから、わたし達もこの前の戦争で悲惨な思いをして、傷つき、悲しんだことを忘れること無く今同じような思いでいる人達を助けることが出来るのだと思います。わたし達の持つ傷は決して意味の無い、価値のないものではなく、却ってそれが人を癒やしまた助けることが出来るそんな大切なものなんだと言うことを、今朝の箇所からわたし達は学び大切にしていきたいと思います。

祈り

　愛する天の神よ、御名を讃美いたします。

　3月も終わりを迎え、本格的な春の到来と共に卒園の時期を迎えました。今年も新しい卒園児を、ぶじおくりだすことができました。そのことを感謝いたします。どうか、この子どもたちの将来が守られ平和な世界の中を生きることが出来るように守ってください。どうかこの日本の国が戦争を起こしたり、巻き込まれたりすることが無いようにしてください。

　主イエス・キリストの十字架をおもう受難節を私たちは過ごしています。本当に、この世界は苦しみや悲しみに満ちています。そしてそのほとんどが私たち人間が自分の求めるものだけを最優先し、他者を押しのけ生きることこそそのための手段だと間が得てきた結果とも言えます。どうか、私たちがそんな利己主義や自己中心の罪から解放されて、生きることが出来るように導いて下さい。どうか、そんな罪を悔い改め本当に価値のある者を求めていくことができるようにして下さい。

　この日本の国のために祈ります。神さま、この日本の国も不安定な世界情勢のため、そして世界的なパンデミックのために大きく揺れています。特に、ロシアのウクライナへの侵略戦争のために、経済も思うように成長できていません。どうか、このような不景気の中で人々が心の平安を持って生きることが出来ますように。変化する世界情勢に目を奪われ、心を騒がせるのではなく変わることのない、神さまの愛に信頼して平安の家に歩むことが出来るように守って下さい。

　そしてなによりも、この日本の国もかつては侵略戦争を行った国として、その罪を忘れるのではなく、その罪を償うためにも平和の為に尽くすことが出来るようにして下さい。どうか、戦火の中で苦しんでいる人たちに私たちがその思いを伝え、励まし合っていくことが出来るようにして下さい。

　様々な事情により、ここに集うことの出来ない兄弟姉妹もあります。心に傷を負っているもの、体の痛みを覚えるもの、どうか、あなたがそんな痛みをも、豊に用いてくくださり、癒やしを与えて下さる方であることを知ることが出来ますように。どうか、癒やし慰めを与えて下さい。この祈りを愛する主イエス・キリストの御名によっていのります。アーメン。